

# 平成26年度第2回 区政モニター会議 会議録（要旨）

平成26年7月24日（木）

（昼の部）午後2時～午後4時

区役所 8階第一会議室

- 1 広報課長あいさつ
- 2 高齢者福祉課長、介護保険課長あいさつ
- 3 事業説明
- 4 事例検討（高齢者福祉課関連）
  - （1）健康づくり（介護予防）事業の周知について
  - （2）いきいき館（敬老館）の利用者拡大について
- 5 事例検討（介護保険課関連）
  - （1）おとしより相談センターの認知度向上について
  - （2）認知症サポーターの養成について

## 事例検討（高齢者福祉課関連）

中央区の高齢化率は16.3%と23区では最も低くなっていますが、高齢者数は2万1,613人と年々増加しています。

そこで高齢者一人ひとりが病気や要介護になることなく健康寿命を延伸し、いつまでも元気で質の高い生活を維持するための取組が必要となってきます。

### 1 健康づくり（介護予防）事業の周知について

区では、これまで、元気な高齢者向けのマシントレーニングを中心とした「さわやか体操教室」や、生活機能が低下した方のための「はつらつ健康教室」等、さまざまな健康づくり（介護予防）事業を実施してきました。昨年度実施した「中央区高齢者の生活実態等調査（以下「実態調査」）」によると、各事業の周知度は「さわやか体操教室」が38.6%、「はつらつ健康教室」が52.2%でした。

今後さらに健康づくりに取り組む高齢者が増えるよう、こうした事業を周知していくためにはどうしたらよいかご意見をお聞かせください。

意見 私自身、高齢者だが、自分のことは自分でやらなければ、そもそも生きがいがないのではないかと思い、毎朝、走ったり歩いたりを10kmほど行うなど、健康管理には気をつけている。

意見 10年後に迫った2025年問題（※）を考えると、現在の60歳代の人を中心に健康づくり事業の周知に努めてはどうか。（いきいき館の利用者拡大についても同じ）

意見 民生委員を活用して、健康づくり事業の周知を積極的にやってもらっては

どうか。(いきいき館の利用者拡大についても同じ)

意見 中央区に来て福祉行政について感じたのは、民生委員の方々の活躍がなかなか目につかないことだ。やはり民生委員の活用をもう少し踏み込んで検討してみる価値はあると思う。

意見 女性の中から見ると、男性のほうが年をとると元気でない人が多い。女性は60歳でもまだまだ元気な人が多い。また男性は地域社会での付き合いが上手でない方が見受けられる。その点、女性は地域社会でのつながりが強い。だから、民生委員を活用して周知するのであれば、地域社会で孤立しがちで元気をなくしている男性に、より目を配ったほうがいいたろう。

高齢者福祉課長 先日、高齢者部会の民生委員の方々を対象に、いきいき館見学ツアーを行って、実際、そこでどんなことが行われているかを知っていただいた。その上で、いきいき館への参加を勧誘していただくようにした。

意見 区ではいろいろな事業で町会・自治会に出前講座をやっているが、そこでの情報がなかなか個々の住民に届かないのが現状。やはり費用はかかるかもしれないが、区報などで一人ひとりに届くようにしないといけないだろう。

意見 いわゆる独居高齢者対策として、健康づくり事業を考えてもいい。そうすると、個々の高齢者に葉書を出すなどの周知方法も考えられる。

意見 健康に生活するには、やはり生きがいを持って仕事に取り組むことが大切だと思う。だから、シルバー人材センターで、退職したもののまだまだ働ける人材をもっと活用できるように仕事を増やしてほしい。

意見 高齢者の人材活用に賛成。高齢者には豊富な体験と知恵があるので、それを社会に還元していけばいい。また高齢者になると、新たに人間関係をつくれないう人がいて、それが不健康な生活につながる。高齢者の人間関係づくりのためにも何か仕事をしてもらうのがいい。

意見 「後期高齢者」という呼称には、良くない印象があり、それが高齢者の気持ちに不愉快にしたり、萎縮させる。例えば「長寿高齢者」と変えてはどうか。

意見 私自身もそうだが、健康づくり事業やいきいき館を利用するようになったら、もう自分は年寄りなんだなと思ってしまいうだろう。まだまだ若い者には負けないという気持ちを持っている高齢者も多いので、そういう方々にもアピールできるような内容でPRすればいい。

意見 老老介護や在宅介護では限界があるので、未利用の公有地、区有地を活用しての特養施設の充実は今後も必要ではないか。

意見 概して今の高齢者には元気な人が多い。だから、区も予算の配分として、健康づくりやいきいき館等々の敬老事業だけではない配分も考えていただきたい。

## 2 いきいき館（敬老館）の利用者拡大について

区内3カ所にあるいきいき館（敬老館）は、従来の憩いの場としての機能に加え、仲間づくりや生きがいくりの場でもあり、スタッフによる声かけや見守りを行うとともに、介護予防につながる多くの講座を開催しています。

実態調査によると、「現在いきいき館を利用している」は7.9%、「今後利用したい」が28.9%、「利用したいと思わない」が34.4%でした。

さらに多くの高齢者の方にいきいき館へ足を運んでもらえるようにするにはどうしたらよいかご意見をお聞かせください。

意見 私は浜町のいきいき館を利用している。講座も充実していて、職員の対応も丁寧だ。何よりいろいろな方々とおしゃべりし、情報交換ができるのが楽しい。また同館には放課後、子どもが来て、彼らやその母親たちと交流を持てるのもいい。他区から来て14年だが、中央区は熱心かつ先進的に高齢者対策をしていると思うので、今後も自信を持ってやっていただきたい。

意見 私も浜町のいきいき館を利用しているが、そこに行きたがらない友人に理由を聞くと、「あそこにはリーダー的な人がいて、どうも行きにくい」と言っていた。実際にいるかどうかわからないが、そういう誤解や予断を持っている人がいるので、その辺を解決したらどうか。

意見 いきいき館に高齢者の方が行かないのは、やはり興味がないのだと思う。興味を持ってもらうためには、まず行ってもらうことが必要だ。それには例えば、行けば何かもらえる等の行って得するイベントを考えてはどうか。

意見 高齢になると字を読むのが辛くなり、区報でPRしてもなかなか高齢者は読まない。それよりも口コミをうまく利用する方法を検討したらいい。

意見 いきいき館で行っている講座のテーマについて、もう少し利用者やこれから利用しようとしている高齢者の希望を聞き入れてほしい。（例えば、高齢者の食生活・栄養指導、生活設計、遺産相続について）

意見 いきいき館での講座は共通的なものをテーマに行っているが、個人にはそれぞれの興味がある。そのような個人的興味にも対応できる体制を整えてはどうか。例えば高齢者も現役時代にはいろいろな専門知識を蓄えただろうから、そのような専門知識を有する人を専門家として登録しておき、個人的興味に対応してもらってはどうか。

意見 いきいき館では現在も近くの保育施設と交流をしていると思うが、それはあくまでも一時的なものである。いっそ、いきいき館と保育施設を併設してはどうか。そして昼食は高齢者と幼児と一緒に食べるなど、常に交流の場が持てると、高齢者・幼児双方に好影響を与えるのではないか。

意見 子どもが嫌いなのではなく、子どもの甲高い声が耳障りとか、子どもの動きに対してとっさに反応できない等で、子どもと接するのが苦手な高齢者も多く、いきいき館と保育施設を併設するのには反対だ。

## 事例検討（介護保険課関連）

### 1 おとしより相談センターの認知度向上について

おとしより相談センターは、介護保険法にもとづき京橋・日本橋・月島の地域に1カ所ずつ、平成18年度に設置しました。

業務として①総合相談・支援②権利擁護③包括的・継続的ケアマネジメント支援④介護予防ケアマネジメント⑤要支援者のケアマネジメントを、行っています。

より地域に根ざしたセンターとなるように、パンフレットや独自の情報紙の発行や、町会や自治会に向けて出前講座を開催し理解を求めているところです。

その結果センターの認知度は、平成22年度に実施した実態調査では「知っている」が41.4%でしたが、平成25年度の調査では58.2%に向上しました。

今後は、地域包括ケアシステムの核となるセンターの認知度をさらに向上させ、高齢者の方への適切な支援につなげる必要があります。

おとしより相談センターの認知度向上に向けて、ご意見等をお聞かせください。

意見 大企業が多い地区では大企業向けに、商店が多い地区では商店街振興会向けにそれぞれ出前講座等を行うなど、地区の事情に合わせPRに努めたい。

意見 相談センターといっても、そもそも何を相談していいかわからないし、相談することをプライドが許さないと思っている高齢者も多い。その辺のハードルを下げていくことから始めてはどうか。

意見 私もおとしより相談センターを利用したが、とても親切に対応いただいた。そういう利用者が口コミで周りの人たちに利用を勧めればいい。

意見 個人的な経験で言うと、ほかの相談センターに電話したら、とても無礼な態度で対応され、不愉快になった。以来、そこには電話していない。

介護保険課長 おとしより相談センターに関しては、そういう評判を聞いたことがないので、気軽に相談いただきたい。

意見 おとしより相談センターから家に電話がかかってきたとき、私が不在だったため、夫に「折り返し電話をください」と伝言を残したが、何の要件かの概略も伝えられてなかったもので、こちらも準備できずに電話をした。その点はもう少し丁寧に対応いただきたい。

### 2 認知症サポーターの養成について

平成25年6月に厚生労働省研究所が、平成24年度時点で65歳以上の高齢者のうち約462万人が認知症である推計を発表しました。

本区でも、認知症の高齢者が増加するなか、区では平成18年度から、区民の方や区内事業所にお勤めの方を対象に、認知症について正しい理解を持ち、認知症の方やご家族を温かく見守る応援者として認知症サポーターの養成を行っています。

今後も高齢化の進展に伴い、認知症の方の増加も予想されることです。認知症に

なっても住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、認知症サポーターの増加に努める必要があります。

より多くの方に講座を受講していただくための周知について、ご意見等をお聞かせください。

意見 認知症サポーターに興味を持っているが、どうしたらいいかがわからない人は多いと思うので、そのような人たちの協力を得る方法を何か考えるべきだ。

意見 最近、全国で認知症の高齢者の方が行方不明になっている例が多く報道されているが、区も独居高齢者の中に認知症の方がどれぐらいいるかを把握し、対策を立ててほしい。

介護保険課長 確かに独居高齢者の中に認知症の方がどれぐらいいるかは把握していないが、民生委員が2年に1度、独居高齢者宅を戸別訪問している。そこで認知症等、支援が必要な方を見つけたら、おとしより相談センターにつなげている。

意見 認知症の方の行方不明対策の1つとして、外出時に自分の氏名・住所を記載したものを携帯できるように、区からマイホルダーを配ってはどうか。

意見 認知症の方がマイホルダーを持って外出するとは限らないので、氏名・住所の情報をバーコード化して、衣服等に縫いつけるようにしてはどうか。

意見 テレビの情報ですが、靴にGPSを埋め込んであるものがあるそうです。

— 了 —

#### ※2025年問題

2025年以降は、2200万人、4人に1人が75歳以上という超高齢社会が到来します。これまで国を支えてきた団塊の世代が給付を受ける側に回るため、医療、介護、福祉サービスへの需要が高まり、社会保障財政のバランスが崩れるとも指摘されています。(東京新聞 平成26年2月5日 から引用)